

衛生管理と生産性向上を追求する 環境保全型養鶏

石川県羽咋郡押水町

北栄産業有限会社 市村 栄宗
(養鶏経営)

1 経営管理技術や特色ある取り組み

従来から自家育成にて強健な鶏を作出し、独自のアイデアで「成鶏ケージ」や「給水トイ」等を改良して、生産性の向上と省力化に努めていた。また、鶏ふん処理についてはハマダ式強制鶏糞発酵装置を導入して効率化を図る一方、脱臭方法についても活性炭脱臭設備や土壌脱臭設備を設置する等、早くから環境保全にも取り組んでいた。

市村栄宗氏が、経営移譲されてからの取り組み内容は次のとおりである。

1) 生産性の向上について

(1) ウインドレス鶏舎の建設

開放鶏舎では環境保全、衛生管理、生産性の向上には限界があり、養鶏を継続するためにも公害対策を重視するウインドレス鶏舎の建設が必要になった。

断熱効果で舎内環境をコントロールすることで鶏に余分なストレスを与えず、猫、犬、鳥はもちろん、ハエ等の昆虫類も侵入しないため、外部から病気進入の危険性がなくなった。そして、人間が舎内に入る際にも衣服、足元、機材等すべてを殺菌することによって無菌鶏舎といっても過言ではないだろう。

(2) 自家育成の実施

鶏にとって育成期間は最も重要な時期であるから、育成鶏の飼育方法や作業方法のマニュアル化を図っている。

体重測定や採血を実施してシステムパックにより育成鶏の健康管理を把握するとともに、温度、湿度、換気等の環境制御と、シビアなコントロールによる点灯管理を実施し、自農場に合った強健な鶏の作出と初産卵重を大きくすることに心掛けている。

育成期間のワクチンプログラムと主な作業は次のとおりである。

表 1 育成期間のワクチンプログラムと主な作業

0日齢	POX、MD	孵化場で実施
5日齢	デビーク作業	
14日齢	NB生	飲水
19日齢	IBD	〃
28日齢	IB	〃
35日齢	NB	〃
45日齢	振り分け作業	
65日齢	NBBMG、POX、ILT、ICAC	不活化(オイル)
80日齢	NB	飲水

(3) 成鶏の管理

朝、昼、夜の3回見回りをして機器及び換気のコントロールを調整しているが、温度管理は冬場20～22にセット、春、夏、秋は24以上になると徐々に換気量を増やす等、こまめにファンの作動設定を調節している。

とくに夏場対策として給餌を早朝2往復、15時以降3往復させて飼料摂取量のアップを図り、独自のクーリングパットの開発により、ヒートストレスがなく年間を通して能力を発揮できることから、1羽当たり年間産卵量18.1kg、1羽当たり年間飼料消費量35.9kg、飼料要求率1.98を達成している。

これは、精密管理により産卵ピークが96%にも上昇し、90%以上の産卵が34～37週間も持続する等、確かな生産技術に裏付けられている。

しかも、集卵ベルトやエスカレーターに工夫を凝らして独自の破卵防止システムを開発する等、機械メーカーや孵化場メーカー、飼料メーカー等への技術協力や新商品開発等、業界発展にも大きく貢献している。

栄宗氏は「鶏の管理技術だけでなく、設備のコントロール技術、電気の知識などオールラウンドの管理者でなければ、良い成績を引き出すことはできない」と話している。

(4) 設備異常警報システムの開発

ウインドレス鶏舎の場合、少しのミスが大きな損失を招くので、舎内の要所要所には小型カメラ監視装置を設置し、事務所に居ながらにして鶏舎内の様子や各計器盤(舎内温湿度、換気扇の状況、飲水量等)をチェックできるシステムになっている。

また、舎内温度の異常や停電、漏電については異常警報システムが作動し、携帯電話にも繋がるシステムになっているが、このようなシステムはすべて自農場で開発、作製したものである。

そのほか施設や機械の改造と修繕は、部品を卸店から直接仕入れてすべて自農場で実施する等、経費の節減も図っている。

(5) 特殊卵「田舎の卵」と「まじめなたまご」の販売

原卵出荷のみでは卵価の高低が直接経営を左右するので、経営の安定性や継続性の確保、後継者の確保、一般消費者への信頼と地元との調和をめざすため、特殊卵「田舎の卵」(年間一定価格)を販売している。

210～370日齢の鶏に海藻、パプリカ、アルファルファの天然原料とビタミンDやビタミンE等を強化した飼料を与え、生産された卵の10%を厳選し、1日150～200パック限定販売しているが、ギフト用として40個や60個の化粧箱入りも取り扱っている。

なお、平成13年4月よりメディアを利用した販売活動を展開し「まじめなたまご」の販売も開始している。

特殊卵の成分は表2のとおりである。

表2 財団法人日本食品分析センターの分析結果

分析項目	結 果
ビタミンA効力	700IU/100g
ビタミンD ₃	230IU/100g
ビタミンE	4.5mg/100g
コレステロール	357mg/100g

(6) パソコンでの管理

当然のことではあるが、成鶏では各ロットごとの産卵個数、死鶏管理、品質管理はもちろん、鶏卵出荷、飼料仕入、鶏ふん出荷等、育成鶏では体重測定や増体の把握等、すべての面でパソコン管理を実践し、精密養鶏に取り組んでいる。

2) 衛生管理について

(1) 衛生管理のマニュアル化

昨今の食品製造業では、危害分析重要管理点(HACCP)の方式を採用する企業が多くなっているが、当農場でも鶏卵の安全性を追求している。

農場では卵の安全性を確保し消費者の信頼を得ることやサルモネラSEの事故に備え、いち早く衛生管理の対応に乗り出し、生産段階だけでなく従業員の衛生教育(毎日、衛生管理の実施表にチェック)、施設の清掃、衣服・履物の消毒等総合的に管理している。

農場の検査室では、毎週、鶏卵とGP内の機械設備に対するサルモネラ、大腸菌、黄色ブドウ球菌、一般検査の衛生検査と卵質検査を実施するとともに、その記録を保管し、取引先に公表できる体制をとっている。

鶏舎はすべて自動ライン化され、鶏卵は鶏舎内でプロアとブラシで自動クリーニングされ、ほぼ人の手にふれることなく農場専用運搬車にて出荷され、衛生的観点から自農場での破卵(ひび卵)はすべて廃棄処分し鶏ふんたい肥に活用している。

また、廃鶏出荷時には車やカゴ、作業員も農場出入口にて徹底的に消毒を実施して、外部からの病気進入に十分注意している。そして、オールアウト時には、まず2日間かけて埃を清掃し、1週間かけて念入りに水洗、その後、2回消毒してトータル45日間の空室期間を設ける等衛、生面には最大の注意を払っている。

当農場では、ヒヨコから最終段階の卵の出荷まで、すべてに徹底した衛生管理を追求している。

(2) 日常作業管理のマニュアル化

従業員全員に飼養管理の徹底を図るため、日常作業管理マニュアルを作成している。

出入規制チェック、飼料チェック、給水チェック、軟卵チェック、死鶏チェック、健康状態チェック、水フィルターチェック、換気量、温度管理、点灯管理のチェック、清掃のチェック、修繕部品の使用チェック等多数の項目に対しマニュアル化され、社員各自が責任を持って仕事に取り組む体制になっている。

(3) オリジナル飼料の設計

1日の飼料摂取量や飲水量を把握して鶏の健康管理に十分留意するとともに、鶏卵の品質や体重のコントロール、鶏種、季節、食下量、卵重等を加味しながら生産性向上を図り、かつ、経費の削減も兼ねて自農場に合った飼料、すなわちオリジナル飼料を作製（委託配合）している。

また、飼料にはサルモネラSE対策としてオリゴ糖、天然有効土壌菌を配合し、衛生検査済みのものを農場専用車にて運搬する等、安全性には十分留意している。

3) 環境保全について

(1) たい肥の生産

従来から良質たい肥を生産していたが、最近では消費者の要望に応じて数種類のたい肥を作成し全量販売している。また、肥料取締法の一部改正に伴い、先般、石川県知事宛に「特殊肥料生産業者届出」と「肥料販売業務開始届出書」の提出を済ませたところである。

(2) 堆肥自動選別袋詰機の導入

たい肥は4種類6銘柄を製造販売していたが、消費者やたい肥取扱い業者のニーズにより、現在、14種類20銘柄を製造しているが、供給が追いつかない状況が続いている。

また、袋詰めにかかる労力の軽減を図るため自動選別袋詰機を導入したが、1時間に200~250袋の出荷体制となり、労力軽減とともにたい肥販売に大いに貢献している。

(3) 大型オゾン脱臭設備の導入

品質の良いたい肥を製造しても、その過程での臭気を克服しないと、将来的に経営存続が危ぶまれることを懸念し、平成6年に日本で初めて大型オゾン脱臭設備の導入に踏み切った。

さらに悪臭除去率を高めるため自分で設計施工し、平成13年8月と12月に2号機、3号

機を相次いで稼働させた。

これは発酵舎を密閉し、臭気をダクトで吸引して脱臭装置に導き、洗浄塔でオゾンガスとオゾンを含んだ水を、1分間に250Lをシャワーのように浴びせると悪臭成分を分解（酸化反応）してしまい、処理後はまったく臭気を感じさせない、きれいな空気になって大気中に放出するシステムになっている。

この設備は、たくさんの畜産関係者に視察されているが、視察者の反応も良好のようである。

2 経営・活動の内容

1) 労働力の構成

平成13年2月現在

区 分	続 柄	年 齢	農業従事日数	うち畜産部門	備 考
家 族 (法人)	本 人	35	300	300	
	妻	35	300	300	
	父	77	0	0	
	母	74	0	0	
	長 女	7	0	0	
	長 男	2	0	0	
	二 女	0	0	0	
常 雇	男 A	55	270	270	
	男 B	26	136	136	
	女 A	27	270	270	
臨時雇	のべ人日		1,390	1,390	主な作業内容 GP作業、鶏移動
労働力計	6.6 人		2,666	2,666	

2) 収入等の状況

平成11年3月～平成12年2月

区 分	種 類 品目名	飼養規模 (羽)	販売量 (t)	販売額・ 収入額(千円)	収 入 構成比(%)	概ねの 所得率(%)
農業収入	一般鶏卵		1,947	352,641	93.7	
(畜産部門)	特殊鶏卵		34	12,088	3.2	
	鶏糞			7,556	2.0	
農外収入	卵価基金など			3,918	1.1	
合 計		109,683		376,203	100.0	19.3

3) 土地所有と利用状況

(単位：a)

区 分		実面積	うち借地	畜産利用地 面 積	備 考
個 別 利 用 地	耕 地	田			
		畑			
		樹園地			
		計			
	耕 地 以 外	牧草地			
		野草地			
		計			
	畜舎・運動場	500	500	500	
	そ の 他	山 林			
		原 野			
計					
共同利用地					

4) 家畜の飼養・出荷状況

(単位：羽)

品 種 区 分	幼すう	中すう	大すう	成 鶏	備 考
期 首				111,763	
期 末	26,000			110,735	
平 均				109,683	
年間出荷量				鶏卵 1,981,604kg	

5) 施設等の所有・利用状況

種 類	構造 資材 形式能力	棟 数 台 数	取 得		所 有 区 分	備 考 (利用状況等)
			年	金額(千円)		
畜 舎	ウインドレス鶏舎	鉄骨	1	H2	37,218	自己
	ウインドレス鶏舎	鉄骨	1	H2	27,268	自己
	ウインドレス鶏舎	鉄骨	1	H9	48,930	自己
施 設	電気設備等		1	H2	4,490	自己
	電気暖房等		1	H2	6,532	自己
	空調設備		1	H9	10,540	自己
	GPセンター	木造	1	H2	8,408	自己
	天日乾燥ハウス棟	鉄骨	1	S62	3,562	自己
	鶏ふん処理場	木造	1	H4	10,077	自己
	たい肥舎1	木造	1	H6	21,591	自己
	たい肥舎2	鉄骨	1	H9	7,425	自己
	さく井工事		1	H9	4,000	自己
	鶏供養石碑		1	H5	13,000	自己
機 械	成鶏ケージシステム	サルメット	1	H2	113,345	自己
	育成鶏ケージシステム	"	1	H2	41,020	自己
	鶏ふん発酵装置	東邦実業	1	S62	6,116	自己
	オゾン脱臭装置	IBSジャパン	1	H6	15,728	自己
	非常用発電器	日立	1	H9	6,500	自己
	自動給餌機	サルメット	1	H9	3,320	自己
	原卵トレーラック詰込機	三共	1	H9	3,670	自己
	成鶏ケージシステム	サルメット	1	H9	87,444	自己
	鶏ふん袋詰機	フレーム工業	1	H10	13,333	自己
	フォークリフト	トヨタ1.5t	1	H3	1,600	自己
	ホイールローダ	TCM1.3m ³	1	H12	2,857	自己
	乗用草刈り機	カワサキ	1	H11	606	自己

6) 経営の推移

年次	作目構成	飼養羽数	経営及び活動の推移
S 33	ブドウ+養鶏	3,000	父はブドウを栽培していたが、鶏ふんを肥料代わりにするため養鶏を開始した。
S 41	養鶏専業	20,000	ブドウ経営は労務管理が大変なことから、制度資金を借入れ、養鶏専業とする。
S 47	養鶏専業	50,000	給餌、集卵、除ふんの工夫をこらし、自家労働力主体で50,000羽体制を確立する。
S 61	養鶏専業	50,000	石川県立農業短期大学卒業と同時に日清製粉研究所にて研修を開始する。
S 62	養鶏専業	50,000	大規模養鶏場(京都)にて研修を開始し、海外農業研修に参加する。
S 63	養鶏専業	50,000	経営に参画する。
H 1	養鶏専業	50,000	父より農場管理全般を移譲される。
H 2	養鶏専業	87,000	環境保全への配慮、品質管理の向上、衛生管理の徹底を図るためウィンドレス鶏舎(育成舎、成鶏舎)を新築する。同時にパソコンにて飼養管理等の分析を開始する。
H 6	養鶏専業	87,000	環境保全への配慮から大型オゾン脱臭設備を導入する。
H 7	養鶏専業	87,000	特殊卵(田舎の卵)の製造販売を開始する。
H 8	養鶏専業	87,000	父より会社経営全般を移譲される。
H 9	養鶏専業	112,000	環境保全への配慮、高品質卵の作出と産卵成績の向上を図るためウィンドレス鶏舎(成鶏舎)を新築する。同時に消費者ニーズに対応するため鶏ふん自動選別袋詰機を導入する。
H 10	養鶏専業	112,000	衛生管理の徹底を図るため、自社による鶏卵の品質及び衛生検査と衛生管理のマニュアル化を導入する。
H 11	養鶏専業	112,000	パソコンでの精密養鶏を実践するとともに、インターネットの活用により情報収集を開始する。
H 12	養鶏専業	112,000	全国優良畜産経営管理技術発表会にて最優秀賞を受賞する。異業種交流グループへ加入し販売拡大に取り組む。
H 13	養鶏専業	112,000	安全性の強化と品質向上を目的に、農場マニュアルを見直して強化する。特殊卵(まじめなたまご)の販売開始とメディアを利用した販促活動を展開する。オゾン脱臭設備の2号機、3号機を稼働させ、スクープ式鶏ふん発酵施設2号機を導入する。

7) 経営実績

		期 間	11年次	12年次
経営の概要	労働力員数 (畜産)	家 族 (人)	1.6	1.6
		雇 用 (人)	4.5	5.0
	成鶏平均飼養羽数 (羽)		109,683	107,684
	年間鶏卵生産量 (kg)		1,992,071	1,977,884
	年間鶏卵出荷量 (kg)		1,981,604	1,967,043
収	採卵鶏部門年間総所得 (千円)		71,842	67,052
	成鶏100羽当たり年間所得 (円)		67,287	62,267
	所 得 率 (%)		19.3	18.8
益 性	成鶏100羽当たり	部門収入 (円)	339,429	331,869
		うち鶏卵販売収入 (円)	332,540	324,453
		売上原価 (円)	195,647	203,720
		うちもと雑費 (円)	12,150	12,565
		うち購入飼料費 (円)	118,386	112,676
		うち労 働 費 (円)	6,426	10,138
		うち減価償却費 (円)	35,637	32,678
生 産 性	成鶏100羽当たり年間鶏卵生産量 (kg)		1,816.2	1,836.7
	成鶏100羽 1日当たり産卵量 (kg)		4.98	5.03
	鶏卵 1kg当たり平均販売価格 (円)		184.1	177.6
	成鶏100羽当たり年間飼料消費量 (kg)		3,595	3,736
	飼料要求率		1.98	2.03
	育成率 (初生雛) (%)		98.9	98.9
	育成率 (中大雛) (%)		-	-
	成鶏淘汰率 (%)		47.5	43.4
	成鶏へい死率 (%)		5.7	5.7
	成鶏補充率 (%)		52.3	53.2
	鶏舎 1 m ² 当たり年間鶏卵生産量 (kg)		768.5	763.1
	鶏舎 1 m ² 当たり成鶏飼養羽数 (羽)		42.3	41.5
	成鶏100羽当たり投下労働時間 (時間)		12.3	13.5
安全性	総借入金残高 (期末時) (万円)		26,946.2	23,275.2
	成鶏100羽当たり借入金残高 (期末時) (円)		245,673	216,144
	成鶏100羽当たり年間借入金償還負担額 (円)		15,449	4,063

3 家畜排せつ物処理・利用方法と環境保全対策

1) 家畜排せつ物の処理方法

たい肥を使用する消費者の要望に対応して4種類を作成している。

(粒状)

- ・種類..... 3種類(3mm以下、3～6mm、6～9mm)
- ・発酵処理方法...ロータリー式(東邦実業)

(粉状)

- ・種類..... 1種類
- ・発酵処理方法...スクープ式(太陽興商)

発酵時の消臭を図るため脱臭設備を建設している(日本で初めての大型施設)。

- ・種類..... オゾン脱臭装置(IBSジャパン)
- ・脱臭方法..... 化学反応(酸化反応)

たい肥を選別し、袋詰めしている。

- ・種類..... 4種類(取引先に応じて6銘柄の袋詰め)
- ・方法..... たい肥選別袋詰機(フレーム工業)

製品は製品庫へ。

製品は銘柄ごとに製品庫へ搬入

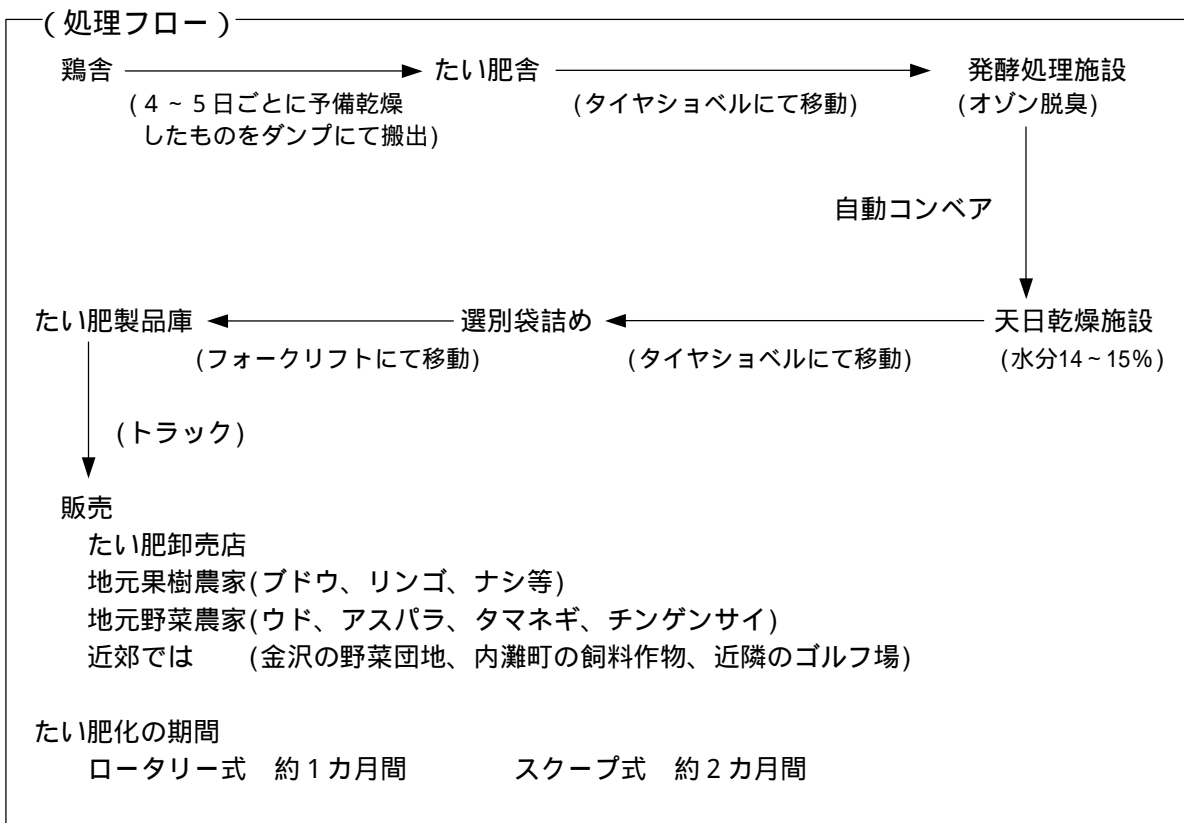


表3 たい肥の品質

(数字は乾物換算値)

分析項目	単 位	粒状(ロータリー式)	粉状(スクープ式)
窒素全量	%	3.7	5.1
りん酸全量(P ₂ O ₅)	%	5.6	5.4
加里全量(K ₂ O)	%	5.0	5.2
炭素率(C/N)		8.1	5.8
全炭素	%	29.7	29.4
銅	mg/kg	44	46
亜鉛	mg/kg	550	570
石灰全量(CaO)	%	20.2	21.3
水分	%	13.8	15.2

(株)大和環境分析センターによる。

2) 家畜排せつ物の利活用

内 容	割合(%)	品 質 等
販 売	92.2	品質は年間一定している。
交 換		
無償譲渡	7.8	地元との協調を図るため及び製品アピールのためのサンプル。
自家利用		
そ の 他		

3) 評価と課題

(1) 処理・利活用に関する評価

鶏ふんはロータリー式及びスクープ式ですべて発酵処理され、発酵時の消臭もオゾン脱臭設備により完璧に実施され、環境保全に十分配慮されている。

製品となったたい肥は全量販売されているが、たい肥の乾物割合が高く使用者に大変喜ばれている。

(2) 課 題

たい肥の品質が良く全量販売しているが、競争が激しく販売単価が下がりつつあるのが悩みである。

したがって、いま以上に品質の向上を図り、消費者の要望にそった製品作りに心掛け、販売競争に打ち勝つたい肥作りをめざしたい。

4) その他

(1) 鶏舎周辺の清掃

パートを1人雇用(鶏舎内の清掃を兼務)し、2週間に1回は敷地内の芝刈りや敷地周辺の草刈りを実施し、農場全体の環境美化を図っている。

また、鶏舎周辺や敷地周辺へは動力噴霧器で月1回消毒薬を散布しているが、環境保全の立場から殺虫剤は極力使用しない方針である。

したがって、広い敷地内にはゴミ一つ落ちてないほどきれいに整理整頓されている。

(2) 樹木や花の管理

敷地内の樹木は、庭師の手入れが年3～4回実施されているので、手入れが行き届き非常にきれいになっている。

また、敷地内の道路際には、プランターに植えられた花々が四季折々きれいに咲き、従業員の気持ちを和ませている。

4 地域農業や地域社会との協調・融和についての活動内容

環境保全を優先するため、鶏舎はウィンドレスに、たい肥発酵時の消臭にオゾン脱臭を実施し、臭いを出さない畜産経営を目指し、地元との調和を実践している。

地元農家(果樹、野菜)へのたい肥の供給は最優先で実施し、近隣の少量使用者には無償で提供する等大変喜ばれている。

押水町の青年団活動にも積極的に参加し、防犯委員や町内の各種行事へのボランティア活動も積極的に対応している。

また、年2～3回開催する町婦人部主催の卵料理講習会には、卵の提供もさることながら、消費者との貴重な意見交換の場になっている(父は押水町の各種委員や石川県養鶏協会長等を歴任している)。

5 後継者確保・人材育成等と経営の継続性に関する取り組み

環境保全を最優先した最先端技術の養鶏を実践することで、経営が生き残り、後継者や人材も確保できると考えられ、次のことを実施してきた。

1) 鶏舎

動物愛護の精神からいうと開放鶏舎や放し飼い鶏舎にすべきかもしれないが、環境保全型の養鶏を考えると、空調設備の完備したウィンドレス鶏舎が最適と思われる。

2) 最先端技術の導入

高度な自動化、省力化、合理化を追求し、衛生管理の行き届いた職場作りをめざしている。

また、官公庁や関係機関、関係業界等の農場見学の受入れや、麻布大学の実習生等も積極的に受け入れている。

3) オゾン脱臭設備の設置

環境問題では臭気が一番問題となることから、臭気の完璧な除去を期すためオゾン脱臭設備を導入し、良い効果を得ている。

4) たい肥の全量販売

使用する側の要望にそったたい肥(14種類20銘柄)を生産することで、循環型社会に貢献している。

5) 休日の確保

正社員の男性Aは、農場長として鶏卵生産部門の責任者であり、一方、女性はGP部長としてGPセンター及び鶏卵出荷の責任者となっていて、仕事に責任とやりがいを持たせている。また、休日については一般会社から見ると少ないものの、日曜日と祝日が完全な休日、土曜日は月1回、連休は交代で休みとしているが、少しでも多く休日が取れるよう努力している。

6 今後の目指す方向と課題

1) 今後の目指す方向

将来的には普通卵の生産をやめ、成分のハッキリした新鮮で安全な高品質の中グレードの特殊卵(200~220円/パックの年間一定価格)の生産を考えている。

敷地に十分な余裕があることから、時期を見ながら最先端のウィンドレス鶏舎を2~3棟建設して、記載羽数の枠組みを遵守しながら成鶏25~30万羽体制にすることも考えている。

12年10月と13年5月に2カ所にホームページを開設して知名度アップを図り、13年1月よりテレビ、ラジオ等のメディアでの広告宣伝を開始し、積極的な販売活動を展開している。

したがって、将来的には衛生管理の行き届いたGPセンター(今も一部実施)を建設して全量自社販売することを考えている。

平成13年11月にスクープ式鶏ふん発酵施設2号機を建設したが、たい肥生産の労力軽減を図るため、ロボットによるパレット積みを考えている。

消費者を最優先とした衛生対策や環境対策をいま以上に積極的に実施し、将来的にはHACCP対応農場やISO取得農場としての認可取得を考えている。

2) 今後の課題

(1) 人材の確保

飼養規模の拡大と自社販売の実施に伴い、将来的には正社員6名、臨時社員15名くらい

の雇用を考えているが、一般会社に負けない優秀な人材を確保する上でも、他農場や諸外国への研修の実施なども必要であろう。

また、人材確保の観点からもマニュアル化の徹底と最先端技術を整備して、早急に週休2日制へ移行する必要があるだろう。

(2) 製品の高品質化

鶏卵について

中グレードの特殊卵(200~220円/パックの年間一定価格)の生産については、特殊卵「田舎の卵」「まじめなたまご」の経験を生かすとともに、安全性や新鮮度、高品質など消費者ニーズに的確に対応できる生産体制の整備と生産技術が必要であろう。

たい肥について

循環型社会の広まりや、有機農産物の消費拡大等からたい肥需要の増加は十分考えられるので、耕種農家やホームセンター等のニーズに合った、いま以上に高品質なたい肥の生産体制の整備が必要であり、たい肥部門の収支バランスを均衡させることも必要であろう。

(3) 広告宣伝の実施

自農場をアピールするため、平成10年に一般消費者と農場視察者用としてカラーパンフを、平成11年にスーパーやバイヤー用として会社案内のCDを作成しているが、全量自社販売となれば広告宣伝は非常に重要で、イメージアップを図るためのコンテンツ等も考える必要があるだろう。

その広告宣伝では卵やたい肥の情報はもちろん、会社案内や設備状況など農場のすべてをオープンにするなど、情報公開を確実に行うことが必要であろう。

(4) 衛生管理の徹底

環境保全と衛生管理については、経営の継続と生き残りをかける意味で、経費をいとわず実施しているが、これからもいま以上に衛生管理の徹底を図り、「卵を生産する農場」ではなく「卵を生産する食品工場」を目指して、消費者の方々と養鶏業界に貢献するという気持ちが必要であろう。